

石川県七尾美術館だより

平成16年1月4日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第36号(冬号)



「能登ゆかりの作品展9」より

志賀町指定文化財

赤壁両遊図屏風(右隻・部分)

池野観了 宝暦3年～文政13年(1753～1830)

江戸時代後期(19世紀)制作

各縦155.5×横327.8

個人蔵

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



展覧会紹介

平成16年1月4日(日) ~ 4月11日(日)
 休館日については裏表紙をご覧ください

「能登ゆかりの作品展」9

観了と雲山 ~ 能登に足跡を残した二人の南画家」

2月28日(土) ~ 4月11日(日)

◆第二展示室

能登地方にゆかりのある様々な美術工芸品を紹介する「能登ゆかりの作品展」も今回で九回目の開催になります。

この度は江戸時代後期に主に能登地方で活躍した二人の南画家・池野観了と山崎雲山の作品を紹介します。

南画とは文人画・南宗画ともいわれ、中国における文人や士大夫の絵画の事をいいます。職業画家の専門の絵画に対して、儒教や詩文などの教養を備えた文人達が描いた絵画で、総じて個性的表現の強いのが特徴です。日本では江戸時代中期以降に定着して有力な画派となりますが、江戸や京都、大坂といった大都市のみならず、知識層を中心に地方でも流行しました。

豊かな自然環境に恵まれた能登地方には著名な文人達が多く来遊していますが、地元有力な十村、肝煎、廻船問屋などの裕福な知識層が彼ら



「雪景山水図」山崎雲山 個人蔵

「山崎雲山自画像」山崎雲山 個人蔵



受け入れ、能登で南画が流行する要因の一つとなつていきます。そして池野観了や山崎雲山などの「能登の南画家」が活躍する土壌となりました。

池野観了(一七五三-一八三〇)は羽咋郡赤住村(現・志賀町赤住)の生まれで、幼名を左京、僧名と雅号は観了といい、号は蘭山、東明、逍遙、恩敬主人などがあります。若年時に京都の高倉字寮に入塾して仏教の研究につとめ、後に生家である恩敬寺の第十四世住職となりました。在京時に南画家として著名な池大雅に師事して絵画を学び、大きな影響を受けます。そして、その後生涯にわたって「大雅様式」の追求につとめた事から「能登の大雅堂」と呼ばれました。

一方、山崎雲山(一七七二-一八三七)は羽咋郡滝村(現・羽咋市滝町)の生まれで、実家は漁業を営む家だったといわれ、本名は吉、通称を瀧吉といい、字を元祥、号は雲山、亀岩、文軒、石洞陳人、雪芙蓉道人などがあります。幼い頃より絵画を得意とし、青年時に上京し長期にわたり滞在、当時の著名な文人達と交友を結びました。特定の師を持たずに独自の画風を展開、また孤独を好み俗人との接触を避ける性格であった事から

「孤高の画家」と呼ばれます。観了・雲山共に各地に作品を遺していますが、やはり出身地である志賀・羽咋を中心とした地域に多くの作品が伝わっています。本展では観了・雲山の作品計約二十点を紹介します。



「虎図襖」(部分) 池野観了 恩敬寺蔵

共通観覧料

一般	個人	団体
500円	350円	400円
大高生	350円	300円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。同時開催の「春の選抜展」と共通料金です。

「春の選抜展」

「池田コレクシヨン・茶道具の名品」

2月28日(土)～4月11日(日)

◆第一展示室

七尾市名誉市民の故・池田文夫氏が収集した「池田コレクシヨン」は茶道美術品を中心とした美術品コレクションです。

その内容はやきものが多く、美濃焼や楽焼が中心となっている他、漆工品・金工品などには石川県ゆかりの作家作品も含まれています。

本展では「池田コレクシヨン」より茶道美術品を計約三十点紹介します。

なお、観覧料は同時開催の「能登ゆかりの作品展9」と共通になります。

◆出品作品紹介

美濃伊賀水指 (みのいがみずさし)

桃山時代(十六世紀)制作

桃山時代には各地の窯で個性的なやきものが生み出されましたが、伊賀焼も作家的な意匠で優れた茶陶を制作しています。その伊賀焼の刺激を受けて美濃で制作された伊賀風のやきものが「美濃伊賀」です。

本作品は全体的に厚手のがつしりとした造りの水指で、いかにも伊賀焼を連想させる技巧的な作風が特徴となっています。



「冬季・所蔵品展」

12月13日(土)～2月22日(日)

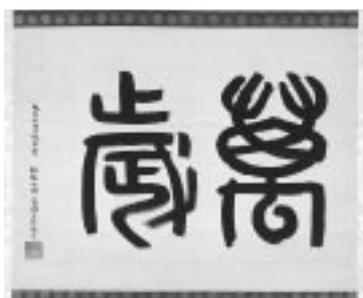
当館では開館以来、美術品を収集し、現在約四五〇点の作品を収蔵しています。今回の「冬季・所蔵品展」では展示室ごとにテーマを設け、当館所蔵品及び寄託品より計五十七点を展示紹介いたします。

◆第一展示室 「日本画と書の魅力」

「墨に五彩あり」というように、「書」や「日本画」において墨は重要な位置を占めています。

墨を用いて生み出された作品には、生き生きとした点と線が躍動し、そこから筆をとる作家の姿までもが浮かびあがります。

日本人の美意識や日本文化を、顕著に表現する「日本画」と「書」の世界をお楽しみください。



「萬歳」 富岡 鉄斎

◆第二展示室 「洋画に見る具象と抽象」

作家は自らの意思をよりの確に伝えるために、様々な表現方法を選びます。終始一貫して、同じ方法を探求する作家や、異なる表現方法を試みる

ケースもあるのです。今回は、洋画の中から具象作品と抽象作品を対照的に展示し、作家の思いやそれぞれの魅力に迫ります。



「椅子の女」
南 政善

◆第三展示室 「木の魅力」

日本は豊かな森をもち、石の文化を持つ西洋と比べると木の文化が発展しました。木彫作品は粘土などで造形する塑像とは異なり、素材である木を削ることにより制作されます。木目を利用した作品から荒々しい彫り跡の作品まで、木の香り漂う作品、十四点を展示します。



「鳥の生体をまねている童」
田中 太郎

観覧料

	一般	個人	団体
大高生	350円	280円	220円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。

等伯コーナー

長谷川等伯展特別講演会報告

「新しい絵画の時代」

講師 黒田泰三氏（出光美術館学芸課長）

等伯は、非常にレパトリーの広い画家であります。レパトリーの広さだけではなく、「松林図屏風」のように自分の心象風景を絵にしたり、



或いは智積院の障壁画のように永徳には描けない絵を描こうとしたり、しかも、抒情、詩情と言ったものを非常に豊かに称えた絵も描きます。

また、同時代の画家と比べて、非常に新しさを表現しています。それも、その時代に合った形で表現しています。そういう、新しさという切り口でお話ししていきますが、その中でも取り分けて目を引きますのが、動物を描いた絵画ではないかと思えます。今日は先に結論を申し上げます。その新しさというのは、実は動物の感性を描くといいますが、動物の情愛を描くという新しさなんです。

本題ですが、比較をしながら見ていきたいと思えます。例えば、同時代の絵にはどういった虎の姿が求められたかというところ、龍と組み合わせて「龍吟すれば雲起こり、虎嘯けば風生ず」です。これは、非常に猛猛な怖い感じのする虎の絵です。日本の絵の歴史で見ますと、「伝統的な虎の絵の形だったんです。ところが、等伯が描く虎を見ますと全く違う雰囲気です。それからもう一つ、等伯自身の芸術生活の中で六十歳代に彼が法眼に叙せられて、「自雪舟五代長谷川法眼等伯」という落款を入れた作品があり、その中にも虎を描いた作品が何点かございます。ボストン美術館の龍虎の屏風、「国華」で紹介された絵もあります。その虎の絵と比べてみても、この五十歳代の虎の絵とは随分と違

います。五十歳代の非常に珍しい、或いは新しい解釈を感じる動物の絵には、いったいどういう意味があるのかを考えていきたいと思えます。

動物を描く絵画は、何も新発見の画題ではありません。例えば展示中の相國寺の「竹林猿猴図屏風」、龍泉庵の「枯木猿猴図屏風」、ボストン美術館の「龍虎図屏風」などは、古くから知られております。ボストン本以外は、法眼落款ではない五十歳代から六十歳代にかけての作品ということですが、それに加えて、ここ十年くらいで見つかった作品というのがあります。その内二点、虎を描いた屏風と白鷺と鴉を描いた作品があります。これらを加えて全体を概観し、同時代の動物を描く絵画との比較、及び等伯自身の中での比較をしていきますと、一つの特徴に気がつきます。それが、情愛を描くという非常に珍しい、当時としては極めて斬新な解釈ではないかと思うわけです。それでは、スライドで確認していきましょう。

まず、これは相國寺の「竹林猿猴図屏風」右隻で、動物の親子です。これはご存知のとおり、大徳寺の牧谿筆「観音猿鶴図」の猿の絵からヒントを得たことは疑いありませんが、多分母親の背中に乗った子どもと、左から近寄ってきている父親と思われる。

はい、次お願いします。これは左隻です。これも屏風として見ますと、こちらには猿が一匹もおりませんのでバランスの悪さを感じますが、実はこれは構図の新しさを狙っていると思っております。

次、お願いします。これは出光美術館の「竹鶴図屏風」です。襖の引き手跡が残っているところから元々屏風であったことが分かります。襖絵ですからもつと枚数が沢山あって、今はたまたま鶴が二羽描かれて見えます。これが右隻です。ちょっとど芦の茂みの中でひっそりと巣籠もりをしているように見えます、多分雌の鶴だと思います。

左をお願いします。左隻を見ますと、それにそつと近づくように見える、多分やがて父親になる雄の鶴ではないかと解釈できるかと思えます。これもご存知のと

おりポーズ、大きさと殆ど牧谿の「観音猿鶴図」と同じですね。ですから、先程の猿の絵と鶴の絵を見て我々が今判断しているのは、牧谿の「観音猿鶴図」を間違ひなく等伯は見たということですが、それは、一つの芸術体験になるわけですから、この牧谿の「観音猿鶴図」を見たという芸術体験が、実は今日お話するテーマに深く関わっていると私は思います。

次スライドお願いします。これは、龍泉庵の有名な腕切りの猿の絵（「枯木猿猴図」）です。これも親子です。先程の「竹林猿猴図」とちょっと違ったポーズですが、画面の構成はほとんど同じです。ですから、これも先程の「竹林猿猴図」も、牧谿の絵からヒントを得ていると言われます。ただ、「竹林猿猴図」と比べてこの絵は、枝を示す墨の線がはっきりと目立ってくるんです。「竹林猿猴図」の方は、枝振りを示す線がこんなに激しくはないです。じゃあ、どちらが先に描いたかということですが、この墨の線の激しさというのは、等伯が六十歳代になった時に非常に顕著になる特長に繋がっていきますので、これはむしろ六十歳代になる直前に描かれたんではないかという気がします。そうしますと、牧谿の「観音猿鶴図」を見て、まず最初に描いたのは相國寺の「竹林猿猴図」で、だんだん彼の中で様式が少しずつ変化していつて、やがて六十歳代の絵の様式に繋がっていく、これは多分六十歳代直前くらいかと思っております。

はい、お願いします。これも、法眼落款が入っております川村記念美術館の「烏鷺図屏風」です。白鷺が右隻、左隻に烏を描き分けた作品です。こつこつ松の枝振り、葉っぱのこつこつ描き方は、等伯独特の筆法であることは間違ひないし、この空中戦をしている鳥の生命力といいますが、猛猛さというものが非常によく表されている、これも従来から知られている代表的な作品の一つだと思います。

次、お願いします。これが今展示されております烏と白鷺の組み合わせです。川村本の「烏鷺図屏風」と区別がつきにくいので、出光美術館では「松に鴉・柳

当館主催の催し・アートホール

◇映画上映会◇【入場無料】

「桃山・金箔乱調の美」(30分)
日時 1月10日・24日、2月14日 午後2時
「荒川豊蔵と志野・瀬戸黒」(25分)
日時 2月28日、3月13日・27日 午後2時

アートホール催し物案内

竹本由起子門下生 第6回ピアノ発表会

2月15日(日) 開演 午後1時30分

日頃の練習の成果の発表の場として、二年に一度催しています。ピアノソロをはじめ、親子連弾、六手連弾などを演奏します。みんな一生懸命練習しています。ぜひ、応援に来て下さい。

入場料 無料

主催 竹本由起子門下生

後援 北國新聞社・ラジオななお

連絡先 竹本由起子

☎〇七六七(五二)七二七二

第8回 ピアーチェコンサート

3月28日(日) 開演 午後2時

ピアノ・管楽器のソロ及びアンサンブルの発表会です。

入場料 無料

主催 松本佐智子・藤波都・古川かおり門下生

連絡先 松本佐智子

☎〇九〇 三八八五 〇〇六一

市民ギャラリー 展覧会案内

第60回 北國写真展 七尾展

1月10日(土)～12日(月・祝)
但し、最終日は午後4時まで

北陸最古の歴史と伝統を誇る北國写真展は北陸三県の写真愛好家から最も権威のある作品発表の場として親しまれています。全入賞作品と入選・審査委員・無鑑査の作を抜粋して展示します。

入場料 無料

主催 北國写真連盟・北國新聞社

後援 石川県・北陸三県カメラ商組合・ラジオななお

連絡先 中山 吉郎

☎〇七六七(五七)一三四八

能登半島・モントレイ半島交流写真展

3月6日(土)～17日(水)

七尾・モントレイ友好協会創立十周年を祝し、自然の聖地「モントレイ半島」の写真家達(25人)が作品を披露してくれます。

三月六日は、モントレイ美術館カッド館長(写真家)による、アメリカでの写真撮影四方山話もお楽しみいただけます。

入場料 無料

主催 七尾・モントレイ友好協会/モントレイ・七尾友好協会(米国)

連絡先 七尾・モントレイ友好協会事務局

☎〇七六七(五四)八八八八

岩田 崇 日本画展「五つの部屋」

3月20日(土・祝)～30日(火)
但し、最終日は午後4時まで

市民ギャラリーは五つの部屋で構成されているので、五つのテーマで展示します。すべて最近作で、「なぜ今、日本画なのか!」と自問自答した日々の軌跡をご覧ください。

入場料 無料

主催・連絡先 岩田 崇

☎〇七六七(二二)三五六一

ボランティアの部屋へようこそ!

監視ボランティア旅行に参加して

池本 藤祐



今回のボランティア監視員の研修は、七尾美術館を設計した内井昭蔵氏の設計をめぐるコースとなりました。いつもの顔に、久しぶりの顔と初めての顔各々に、終日楽しい会話がはずむ車内でした。

宇奈月セレネ美術館「悠久の大地 黒部より」は現代日本を代表する七人の日本画家が、黒部を描いています。塩出英雄 深山新緑 平山郁夫 幻の瀧 福井爽人 黒部河口 田淵俊夫 流(十字峡) 竹内浩一 銀の淑 自分の身体をロープに結んで崖壁に立ち、黒部を取材した手塚雄二 飛龍峡 宮迫正明 後曳橋 は清冽な水や、断崖の岩肌や空気の大自然が間近に迫ってくる、正に圧巻の作品群でした。企画展「現代日本画の表現展」では、みずみずしい若い作家の作品を鑑賞しました。



滑川市「ほたるいかにミュージアム」を見学し、道の駅と運動している新湊市博物館（平成十年十月十日開館）へ。丁度開館五周年記念日の入館となりました。職場体験の中学生から開館記念品を手渡されて、みんな嬉しい気分。江戸時代の測量技術

特に加越能三州を測量した器具や人足等の記録を「絵図」とともに展示、自分の住んでいる附近の地図や地名が記されていて興味ある内容でした。すっかり日が暮れた七尾に帰着しても、何かしら充実した満足した気持ちが続いていました。

『宇奈月セレネ美術館』の旅

小林 綱永



今年も館側のご厚意ご配慮により、日頃なかなか出向く事が出来ない研修コースのもと、館職員の方々・ボランティアさん達に乗せたバスは、一路十月小春の中爽快に富山県へと発車。車中では思い思いにおしゃべりをして、なごやかなひとときを過ごすうちに目的地に着く。ひんやりとした空気、目の前に広がる『秘境黒部峡谷荘厳の大自然』の中に立つセレネ美術館、周囲は紅葉と針葉樹のコントラスト、一枚の大作絵のように目を見張るばかりです。この美術館の理念である『黒部峡谷の大自然を絵画芸術を通して未来へ伝える』、まさしくその通りだと思いました。

館内には多数の感嘆あふれる日本画、中でも心をうつれたのは、四季を通し山の厳しさにも耐え黒部峡谷を作家自ら取材し、制作した雄大な作品。今までは黒部といえばダム印象が思い浮かぶくらいで

したが、今回改めて黒部峡谷周辺の偉大さ奥深さを知ることが出来、本当に良かったと思うばかりです。今日一日ではありましたが、すばらしい作品との出会い、ボランティアさん同志の心の交流も出来、和気あいあい楽しく研修の旅に参加させて戴きましたことに心より感謝いたします。ありがとうございました。

等伯展ワークショップ報告

「よみがえれ！平成の等伯ねはん図」

今年の等伯展での涅槃図展示にあわせ、会期中の九月七日（日）・二十日（土）の両日にわたり当館アートホールにて、「涅槃図ぬり絵」のワークショップを行いました。参加者は子どもから大人まで延べ二十二名。展示会を鑑賞した後でふらりと立ち寄ってくださった方もいらっしました。等伯の気持ちになっって涅槃図制作を体験してもらおう

と、美術館が用意したぬり絵は、ほぼ原寸大の縦約一・五メートル、横約一・一メートルと本物に負けないくらいの大さです。これに、水彩絵の具で色付けをしていきました。

大きなぬり絵なら色塗りも簡単！と思ったら大間違い。「涅槃図」には非常に精緻な筆使いで数多くの羅漢や動物たち(空想上の生物も)が描かれているため、それら全てを色付けするのは至難の技です。参加者は、「こんなにたくさん描くの

大変やね」「何見て描いたのかな?」など、制作された当時の苦労を想像しながら

がんばろー!!

完成!!



ら、筆を動かしていました。完成した作品は遠目にみると色鮮やかで本物と見紛う程の出来栄で、会期中は館内に展示し、来館者の目を楽しませていました。

ポロニーヤ展ワークショップ報告

「がんばらん絵本を作ろうよ!」



たかいよしかず氏来館

今年のポロニーヤ展は会期中、入選作家のたかいよしかずさんと軽部恵さんが来館され、とても賑やかな展示会でした。また、毎週土・日曜日には、もこもこ文庫のみなさんを講師に迎え、四歳小学生を対象とした絵本作りのワークショップを開催しました。当館でのポロニーヤ展は今年で六回目を迎え、このワークショップも既に五回を数えます。計十回、参加者百八十一名と大盛況でした。

使用済みポスターを利用して作る冊子を用いて、ストーリーを考え絵を描き、折り紙や広告チラシ、包装紙に毛糸など何でも材料にして、自由にペー지를飾りつけます。二時間もすると展示作品に負けないくらい工夫を凝らした絵本が出来上がりました。お互いに完成品を見せあい、話の輪も膨らみます。

軽部さんは金沢から、このワークショップに三回も参加してくださいました。参加者のみなさん、気付きましたか?

会場の都合上、当日参加希望された方の中には、お断りせざるを得ないお子さんもおり、「僕もや〜りた〜い」と、お母さんには困った、私たちにはうれしい声も聞こえてきました。また来年も来てくださいね。



平成16年度 石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される場合は、改めてお申し込み下さい。お申し込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。
郵便振替による受付もできますので、ぜひご利用ください。

入会手続きについて

- (1)年度会費 1,000円
- (2)受付開始 3月2日(火)
- (3)受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付【(6)参照】
- (4)受付時間 午前9時～午後4時30分
- (5)会員証有効期限 平成16年4月1日～平成17年3月31日
- (6)郵便による入会手続き

郵便振替用紙をご利用ください。(会員証は4月初旬に「石川県七尾美術館だより」とともに郵送します。)

郵便局備え付けの用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入の上、会費を添えて最寄の郵便局窓口へお出し下さい。

払込料金70円は申込者負担となります。

郵便振替口座	00710-0-50795
加入者名	石川県七尾美術館友の会

会員になられますと...

当館での事業(展覧会、講演会、演奏会など)を掲載した「石川県七尾美術館だより」が郵送されます。

(年度内4回発行)

当館主催の展覧会観覧料が団体料金に割引されます。

(会員本人と同伴者2名まで)

「石川県立美術館」「石川県立歴史博物館」「石川県能登島ガラス美術館」「石川県輪島漆芸美術館」でも観覧料が割引となります。(会員本人のみ)

当館学芸員による特別展の列品解説に参加できます。

1日研修の旅「友の会鑑賞の旅」(年1回)に参加できます。

以上の特典があり、このほかにも当館友の会限定の特別優待(販売グッズの割引など)を予定しています。

ご注意

一旦納入された会費はお返しできません。
また、会員証の再発行はいたしません。

平成16年度 市民ギャラリー&アートホールの使用申し込みについて

当館では個展、グループ展、演奏会など幅広い芸術活動の発表の場として、市民ギャラリー&アートホールの貸室を行っています。平成16年度のご利用は、1月4日(日)から2月1日(日)までを第1次募集期間として受付いたします。

ご希望使用期間が重複する場合、上記受付期間終了後に調整させていただきます。

展覧会等の関係上、ご利用いただけない期間もございますので、ご利用可能期間につきましてはお問い合わせいただくか、当館ホームページをご覧ください。

また、ご希望の方には詳細を説明したパンフレット「利用のご案内(展示室図面入り)」をお送りいたしますので、お気軽にお申し付けください。

市民ギャラリー(全6室+通路)

- ・展示面積(全6室+通路) 250㎡
 - ・展示壁面延長(最大) 137㎡
 - ・最大天井高 3.5m
- 1室(27㎡)から貸室できます。



アートホール

- ・面積 315㎡
- ・ステージ幅 8.5m
- ・客席(固定+可動) 240席



ピアノ・16ミリ映写機・スライド映写機・OHC等もご利用いただけます。

【お問い合わせ・お申込先】

〒926-0855 石川県七尾市小丸山台1丁目1番地
石川県七尾美術館 貸館係 ☎(0767)53-1500

◎次号・第37号(春号)は4月1日発行予定です。

休館日のお知らせ

- 1月 1~3、5、13、19、26
- 2月 2、9、12、16、23~27
- 3月 1、8、15、22、29

交通案内

- 車.....金沢より能登有料道路
利用約1時間20分
- タクシー...JR七尾駅より約5分
- 徒歩.....JR七尾駅より約20分
- 市内循環バス...JR七尾駅より西回りに
(まりん号) 乗車約6分
- ななおコミュニティバス...JR七尾駅より西コ
(ぐるっと7セブン) ー스에乗車約10分
(H16.3.31までの試験運行)

